
貧乏神と私。

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貧乏神と私。

【Zコード】

Z8374K

【作者名】

imaiwa

【あらすじ】

若い夫婦は夫の失職をきっかけに、ボロアパートに引っ越してきてた。だが、そこには貧乏神が住み着いていた。

(前書き)

ついでに言葉を元に書いてみました。

木造のアパートの外壁は酷く時代がかつていて、軽く見積もっても築50年は越えているだらう。

「ここに住むの？」

「うん……」

夫、隆夫は貧相な細面を更に醜く歪め頷いた。私は諦め顔で一つ溜息をつく。

「お母さん！ でっかいケムシ！」

「こりゃ触るんじゃないよ」

8歳の長男茂男がアパートのひび割れたコンクリートの地面でモスラのように這う、毛虫をみつけ、好奇心を顔に漲らせ楽しそうに眺めている。

大家との契約も済んで、5日後には前のアパートからこちらの部屋へ引っ越すために荷物の搬入が始った。私たちの部屋はアパートの右側にある錆びついた青い階段を上り、長い廊下に沿うように並ぶ5つの部屋のうちの丁度真ん中、つまり階段を上りきつて通路沿いの3番目の扉だ。灰色の木の扉はこれまた古く、建てつけが悪いせいが、開け閉めするごとに蝶番が軋む。この部屋に引越屋の恰幅のいいおじさんや、若い男性が私たちのわざやかな家具や荷物を運び入れていく。

「奥さん、テレビはここでいいですか？」

「はい」

所狭しと家具や衣類などが狭い部屋にひしめきあつてゐる。30分も経たない内に全てのものを運び終え、引越屋は帰つていった。「はあ～あ、外も酷いけど中もまたなんかすごいわね」

「そうだな」

全ての家具を部屋にの隅にしつらへ、部屋を見渡した。真ん中に

ぽつかり空いた空間の下には古い畳がびっしり敷き詰められている。その表面はささくれ立つており、薄い灰色が滲んでいて汚らしい。

私はせめて、見かけだけでもと思い、前のアパートでも使っていた橙色がかかった茶色の絨毯で畳一面を覆いボロ隠しをする。茂男はその上で奇声をあげながら転がりまくっていた。

「もう~、そのへんにしどきなさいよ」

言いながらも、子供の無邪気な姿は私の心に少なからず明るみをもたらした。

「父ちゃん、仕事みつけないとね」

「そうだなあ、警備員の口でもハロワで探してくれるよ」

夫は元々自動車工場で派遣社員として働いていた。しかし、このところの不況の煽りを受け、リストラの憂き目に遭い今は無職だ。薄いセーターに覆われた広い背中は、どことなく頼りなげに猫背になっていた。

「じゃ行って来るわ

「うん、頑張ってね」

だけど、萎れてもまだ20代の私たち、なんとかなるはず。19歳の時結婚して今5年目。まだまだ、なんとかなる。そんな前向きな気持ちだけは私は捨てなかつた。

夫の背中にバンと一発張り手。

「もつと背伸ばして！」

「お、おう」

自信を失いかけていた隆夫の顔にどことなく生氣のようなものが漲る。私の張り手が彼の心に響いたのかな。とにかく、夫は少し機敏な動きを取り戻したかのように見えた。

子供は今は春休み。引っ越ししてきたが、前のアパートとは目と鼻の先の地域なので、息子の学校を変える必要はなかった。当然私も、

仕事場は変わる事無く、明日の朝からスーパーのレジのパートに出る事になっていた。

「行つてきま～す！」

子供はさっそくビニカへ遊びに出かけた。友達の家へ行つたようだ。私は部屋の細かい後片付けを済まし、絨毯に掃除機を掛ける。それが終ると、南向きの格子型の窓を、ききひとつ音を立てて上に引き上げた。部屋の濁んだ空気を押しのけるように、春の爽やかな風が中に吹き込んでくる。住んでいる地域は同じなのに、なぜか遠方にでもやつてきたような錯覚に陥る。

「さてと」

私は部屋の墨にある開き戸の押入れに向かう。そして開け放つた。埃やかび臭い匂いが漂つてしまつたが、虫の死骸などはなく、中はがらんとしていた。虫嫌いの私にとって、それだけは僥倖とも言えるものだった。雑巾を奥にある流しでぬらして絞り、中拭いていうと考えた。

その時

押入れの真上から、奇妙な声が。

「お前さんが、新しい宿主か」

「え？」

と上を振り向ぐが、高い天井の上には何もない。
いや、いるはずがない……

私は慄然として、その場に立ち尽くした。
が、後ろに何者かの気配を感じる。

私は恐る恐る振り向く。

そこには 得体の知れない氣味の悪いおじいさんがいた。

我が物顔で畳の上でどかつと胡坐をかけてこちらを見ていた。

老人は青い襦袢のようなものをきて、腰に濃紺の帯を巻いている。

「あ、あなた！ 誰！？」

私は悲鳴にも似た声をおじいさんに放つ。だが、黙つたままにやつと口元を緩ませてこちらを見ている。

怖すぎる……盗みか、強盗か、もしくは……婦女暴行！？ 私は彼の顔を強く睨んだまましばらく立ち尽くす。目を離したら負けだ なぜかそう強く思う。相手の目を睨んだまま、ゆっくり後退りをして入り口の扉まで移り手を掛けた。だけど、鍵を閉めたわけでもないのに、ノブを回しても扉は開かない。ガチャガチャと虚しく金属音だけが響く。私は体を傾け流し目でノブを確かめると、やはり、鍵はかかっていなかつた。だが、開かないのだ。

まるで誰かが扉の外側から押しているかのように。

「逃げなくてもいい、奥さん」

「ひ、」

唐突な老人の声に、私は大きな悲鳴を上げようとしたが、声が出てこない。声帯だけが金縛りにでもあつたかのように。鼓動は高鳴り、耳にまでその音がこだまする。体にじとじと不快な汗が滲んでいるのが分かる。

「あ、あなた誰！？」

それでもなんとか声を腹の底から振り絞り、氣味の悪い老人に尋ねた。

「誰つてわけじゃないが、言つなれば……貧乏神といつものじゃ」

「び、貧乏神！？」

老人は名乗ると、急に立ち上がって口の端を吊り上げ野卑た笑みを浮かべた。

そして、怯えてわななく私の正面に立つと、「よろしくな」

しわがれた声でお辞儀をした。あまりの氣味の悪さに私は強く目を閉じたが 次に目を開けたときには、老人の姿はなかつた。目

を閉じていた間はほんの数秒だったのに、その老人は音もなく目の前から忽然と消えていた。

「父ちゃん、今日この部屋で変なおじいさんがいたんだよ！」

「え……？」

夫は驚き、仔細な状況を私に問いただした。

事の顛末を全て話す。

「それ貧乏神だな……」

夫はいくらか強張った顔を弛緩させ言つた。

「ええ？」

「ほら、よく言つじやないか、貧乏神にいる家は栄えないとか、貧乏に喘ぐことになるとか……」

「ああ、あの昔話で出てくるようなのか……」

夫と顔を見合させて、しばし沈黙が部屋を包んだ。呆けたような顔でいた夫が、自嘲気味に口を切つた。

「でも、俺達もこれ以上貧乏になりようなくないか？ ハハ」

「そ、それもそうね……」

「母ちゃん！ もう一杯！」

私たちの言い知れぬ不安をよそに、茂男はあつけらかんとお茶碗を私に差し出した。

だが、その不安はしばらくして、現実の物へと変わつていった。数日後の夜、夫が仕事から帰つてくると、顔を歪めしきりに足元を指差していた。

見ると、ジーパンと靴下が赤く血に染まつている。思わず私はびっくりして大声をあげた。

「と、とうちゃん！ どうしたのその足！」

「いや、帰り道に坂道で転んだんだよ」

夫を寝かせジーパンをそつと脱がすと、赤い生々しい傷が縦に刻まれている。私はすぐさま応急セットをもってきて、消毒液を駆けてガーゼを上から被せる。白いガーゼはすぐに血を含んで真っ赤に染まつた。

「病院行つた方がよくない！？」

「大丈夫さ、こんなの」

と言つて、立ち上がるうとした夫は、激痛が走つたのか顔を歪めて右足を上げた。

「立てないじゃ……」

その日はなんとか血が止まつたが、翌日は仕事を休ませ夫を病院に向かわせた。

「全治2週間だつてよ……転び方がいけなかつたんだな」

病院から帰つて来た夫は罰が悪そうに言つた。大きな傷ではあつたが、骨には異常がなかつた。夫は警備会社に連絡して、その旨を伝え一週間の休養をもらつた。

その後も、夫の怪我を皮切りにしたかのように、なぜか良くないことが立て続けに起きた。

「うちの親会社がリストラ策の一環で全国の店舗を縮小することになつてね、この店も対象になつた。社員の方々は別の店舗に移つてもらうが……」

パートである私たちは切られるとのことだった。夫は何とか復帰して、警備会社で仕事を続けてはいる。だが、夫だけの収入では厳しい。子供がいるのだ。茂男が成長するにつれ、養育費や学費にそれ相応のお金が必要になつてくる。当然私も新たな仕事を見つけなければいけなかつた。だが、10年に一度とも言われる大不況下で仕事はすぐには見つからなかつた。それでも、取りあえず週4日の朝のコンビニのアルバイトを見つけ働く事になつた。

朝早く出て昼1時には終るバイトなので、私は昼間家にいる事が増えてきた。その分、子供の相手はしてやれるが、夫と私のバイト代だけでは先行きは不安だ。

ある日の昼下がり、テーブルに肘を立てて顔を支え、私は考え方をしていた。この家にやってきてから、否、あの老人と会つてから、がたんっと私たちの生活は落ち込んだ。そんな気がしてならなかつた。といつても、これくらいの事なら今の世ならよくあることだとも思う。だけど、耳に残つたあの響きが、私を疑心暗鬼に陥らせる。

『貧乏神』

そうだ、あのおじいさんがこの部屋のどこかに居座つているから……良くないことが起きるんだ。一体どこにいるんだろうか。私たちの不幸をどこから見ていて笑つてるんじゃないだろうか。この時の精神状態は普通じゃなかつたかも知れない。思い込みが過ぎるのは私の悪い癖だった。そして、私は何故か暗い決意を抱き立ち上がつた。

台所から包丁を取り出すと、私は押入れの前に仁王立ちしていた。扉を開け放つと大きく息を吸い込んで、私は押しireの内部に怒鳴つた。

「こら、貧乏神、出ていかんと刺し殺すよ！」

「…………」

鳥肌が両腕にたつっていた。押入れの暗がりから、急にあのおじいさんの顔が出てきそうで、言つた後はすつと身を引いた。しかし、いくら待てども、何の返事も返つてこない。少しほつとした。思い込みから憤慨の極みに達し、ほほ勢いだけでやつたことなので、怒鳴つてからは後悔していたが、何もなかつたので心底安堵を覚えた。

大きく息を吐いた後、扉をしめて踵を返そうとした。

が、次の瞬間

「人殺し〜！」

振り向いた先に貧乏神がいて、窓を開けて外に向かって声を張り上げた。

「助けてくれー！ 人殺しだー！ ここ奥さんに殺されるー！」

「ちょ、ちょっとー！」

それを止めさせようと窓辺によると、外の道路を歩くおばさんがぎょっとしたような顔でこちらを見上げていた。私は我に変えると、包丁を握り締めている事に気づいた。

「〜、誤解です〜！」

言つたが遅く、おばさんは血相かいて向こうへ走つて行く。窓に身を乗り出しその様子を見ていたが、ふと、貧乏神の存在を思い出し傍を見渡すと、その姿はどこにもなかつた。しばらくして、パトカーのサイレン音が道路に鳴り響いた。

「お騒がせしてすみません」

「頼みますよ、ほんと、」

警察官に深々と頭を下げてその背中を見送る。迷惑そうに顔をしかめている中年の警察官。周りの住民は人殺しの声は聞いてないという。てっきりあのおばさんかアパートの住居人が通報したのだと思っていた。私は不思議に思い警察の事情聴取を受けていると、警察官にここに来た経緯を私は尋ねた。おじいさんの声で、アパートの住人が包丁もつて暴れている！ と連絡があつたということだった。結局、私が一人で癪癪起こして家の中で包丁もつて暴れていたということで済ませられた。貧乏神がしくみだに違いなかつた。

最初のうちは貧乏神の仕打ちに腹を立てたりもしていた。この部

屋を出て行こうかとも思った。だが、日が経つに連れて、私の気持ちは不思議と落ち着きを取り戻していった。何かが私の中で変わり始めていた。貧乏神がいてもいなくとも、真面目に働けばいいだろうって。私には守らなければいけない家族がいる。養わなければいけない子供がいる。なら、実直にその日その日を精一杯生きていくしかない。そんな志を胸に打ちたて、私は貧乏神の事はもう考えず、身を粉にして働くことにした。すると、不思議な事に全てが好転し始めた。ある日、夫が働いていた車工場から連絡があり、またうちで働かないかたと言われた。元々工場での車整備が好きだった夫は二つ返事で了承し返り咲いた。私は私で、別のスーパーでレジの仕事を見つけ、パートとしてこの春から働き始めた。子供も元気に育ち、今年から3年生だ。

「母ちゃん、あんな人ここにいたつけ？」

「ん？ 誰？」

ある日の夕暮れ私が帰宅して窓いでいると、不意に茂男が窓の外を指差して言った。アパートの敷地内にあの老人の後ろ姿が映った。のろのろと敷地から道路へ出て東の方に向かつて歩いているところだった。

(後書き)

書いたけど、あきたりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8374k/>

貧乏神と私。

2010年10月8日15時27分発行